

● 育休取得で「家族という味方」と「会社という味方」の存在に気づく

たった2週間の育児休業取得であり、2週間で育児の何がわかるのか?と笑われるかもしれませんが、この機会がなければ、育児に主体的に関わるどころか、育児を考えることさえ全くなかったはず。育児休業は家族に対する私の考え方を考える大きな転換点となり、私の人生にとって大変価値のある体験でした。

育児休業を取得するまでは、家族のため、会社のためと口では言いつつも、何か孤独で心の中では自分のためだけに働いていた私であったと思います。今回の育児休業をとおし、家族の大切さを学び、「家族という味方」と、このような機会を与えてくれ、積極的にサポートしてくれた「会社という味方」の存在に気が付くことができたことで、今まで以上に一層仕事にも力が入るようになりました。

● モタモタしてられないという気持ちを原動力に、仕事の速度と質を向上

以前よりも労働する意義を明確に感じるようになりました。自分の親が自分にしてくれたように、我が子を大きくする為に働くのだという事を自然と思うようになりました。また、仕事の速度を上げて定時内で仕事を終わらせる意識、終わらせなければいけないんだ、という意識(こんなどころでモタモタしてられない。判断の質と速度を上げ、アウトプットのクオリティを高めた上で、さっさと家に帰らねばならん・・・という気持ち)が以前よりも強くなりました。実際、復帰して以降、殆ど残業はしていませんが、仕事のアウトプットは変わらないか却って上がったかも知れません。上司の評価もまずまずです。

● 育休取得者の登場がもたらした職場の成長

育児をすることが仕事の能力の向上に結びつくかのような議論があります。私にはどうかはわかりません。私は同僚に子育てのため仕事で迷惑をかけていますが、同僚たちは暖かい眼差しで見守ってサポートしてくれます。それは育児休業を取るため、私の置かれた家庭の状態を認識する機会があったからだだと思います。そして同僚たちは私のフォローをして人間のキャパシティを広げています。しかし私自身は、仕事と家庭との綱渡り、仕事や人間的な能力向上どころではなく、日々、子どもに金切り声をあげる回数が増えているのが悩みです。

● 夫婦で逆の立場を経験したことで、お互いに心身両面でサポートしあえるように

4月から保育園に預けて職場へ復帰。二人ともひととおりこなせるので、仕事量にあわせて家事育児を分担したり、交代で息抜きしたりと、多忙な共働き生活乗り切りのための大きなアドバンテージになっています。女性が子育てしながら仕事をするのは、心身両面で想像以上に大変です。お互いが逆の立場に立ったことで、相手の気持ちも分かるようになり、心身両面でサポートしあえることが、男性の育休経験の最大の利点だと思います。

5-13

「育児休業を取得して」

箕浦社志さん

- ①会社員(金融)
- ③30代前半
- ④2週間

5-14

「尚子との育児休業体験記」

山本武さん

- ①会社員
- ②5,000人～
- ③40代前半
- ④3週間

3-07

「赤ちゃんとの初めての生活」

黒川滋さん

- ①団体職員
(非営利団体含む)
- ②0～99人
- ④5か月間

4-18

「宝物」

竹内康二さん

- ①会社員
(環境保全型会員制宅配業)
- ②100～299人
- ③20代後半
- ④3か月間



「仕事の交代要員は何とかできる。けれど奥さんの交代要員は君しかいない」との言葉に励まされた

育児は「育自」



大岩 泰治さん

私は今年6月中旬から9月末までの3ヵ月半、妻の長女出産に当たって育児休業を取得しました。それは「長男の幼稚園通園があり、里帰り出産が出来ない」、「お互いの両親の援助が難しい状態である」ためでした。また、妻自身も今回の妊娠中は自宅安静を要する状態となり、心身共に大変だった事もきっかけの一つでした。

取得期間の検討について最初は「1ヵ月だけ」と妻と話をしておりました。長男の夏休みや妻の健康面を考慮して3ヵ月半に期間を延ばし会社の上司に申請しました。今回の事では妻も「両親は家業があり、遠慮が出てしまうためフォローがあった事は精神的にも楽になった。」と話しており、取得は意義深かったと思います。

今回の申請に当たり自分が調剤薬局の店長を任されている立場であった事や、休業開始が定期的な人事異動後になってしまうため、会社には迷惑をかけてしまうという思いは拭えませんでした。しかし会長から直々に声をかけていただき、その際いただいた言葉が「店長や薬剤師の交代要員は何とか出来る。けれど奥さんの交代要員は君しかいないのだから、その仕事をきちんと頑張りなさい!」でした。

その言葉に励まされ、本部の皆様はじめ店舗のスタッフにも快く送り出していただけて、後任の店長とも引き継ぎを無事終えることが出来ました。店舗をご利用されている患者様にも「残念だけど、頑張ってください。」と励まされた事にも感謝をいたしております。その後も復職してからの時短勤務や自宅近くの店舗への異動も配慮していただき、引き続きサポートしやすい環境を作っていただく事が出来ました。

今までよりも長時間、長男と触れ合う時間が増えた事で言葉の発達、幼稚園での出来事を楽しそうに話す子供の成長を目の当たりにする事が出来ました。以前は何でも妻でないとダメでしたが、今ではお風呂と寝かしつけは私の方が良いと言ってくれています。仕事で帰りが遅くなっていた時は断片的にしか見られなかった小さな成長や長女を可愛がる様子は自分にとって貴重な体験でした。

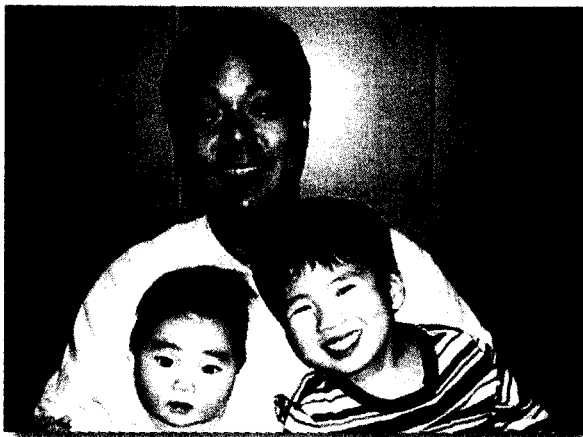
幼稚園の送り迎えても先生方やお母さん達と話す機会が増えた事で、自分の視野が今までよりも広がった様に思います。園児からもスーパーなど園以外でも「こんにちは。」と声をかけられ、覚えて貰えた事は非常に嬉しいです。

以前、自分では店長として「ワーキングマザー」に対して配慮をしているつもりでしたが、自分が育児をする側に立つと、家族の体調管理や時間の制約など両立の大変さがよく分かり、まだまだ意識が不足していたと感じました。

この3ヵ月半の育児休業が長女はもちろんですが3歳の長男にもどの位、記憶に残るかはわかりません。しかし、自分自身にはとても貴重で有意義な時間が得られたと思います。友人からの手紙に「育児は育自だよ」とあり、まさにその通りでした。

この休業制度について相談された時には胸を張ってアドバイスし、取得される方や新しい世代への成長の一助になればと考えております。そして将来的に男性の育児休業が社会的に認知され、今以上に取得しやすい環境が整備されると良いと思います。

最後にこのような機会を与えていただいた会長はじめ社員の皆様一同に感謝いたしたいと思います。



執筆者の横顔：

- ①会社員（調剤薬局店長）、②100人～299人、③40代前半、④平成20年6月～9月（4か月間）



育休を取得するという強い意思と何をすべきかを真剣に考えることが、育休を温かく受け入れてもらう鍵

私の育児休業を振り返って



於久 英樹さん

「明日から名古屋で仕事だな。」振り返れば、長い育休もあっという間に過ぎ去った。GWを含めて、約3週間、家事と育児で一色の毎日の中の出来事を思い出し、家事の大変さを再認識し毎日やっている妻への感謝の念が湧き上がる。

家事には、「時間が無かったから」と言う事は出来ない。「時間が無かったから今晚はお風呂と御飯は無いよ」とは言えないし、思いがけない事も起きる。子供が怪我をしても、逃げ出す事は出来ない。

仕事も別の意味で大変だけど、「まあ、明日でもこれは良いなあ」と言う所もある。家事は、毎日高度な段取り組みを求められ、それをやっていかないと終わらない類の仕事。その中で育児もする妻はすごいと感服する。

娘が生まれる4ヵ月前に社内規定が変わり、男性でも子供が2歳になるまでに育休を取得出来る事を知り、直ちに取得を決意。時期は、後で周囲と相談すれば良いと考えた。

その後、名古屋への転勤がちらほら聞こえて来て、生まれる2ヵ月前に転勤が決定。家族会議（と言っても妻と息子と私の3人）で、私は名古屋へ単身赴任、新年度が始まったら、直ちに、育休を取る事にした。

と言うのも、息子も小学一年生になり、環境の余りの変化に妻への負担の大きさは想像がつかず、兎に角、娘の首が据わる3ヵ月間は出来る限りの人手がいると言うのが二人の結論だった。

会社の同僚、上司には、「育休を取る」と機会があれば言い続け、同時に、自分の仕事は、細大漏らさず何でも巻き込み、取得2ヵ月前から自分が不在でも業務に支障の無い体制を目指した。特に、不在中に迷惑をかける海外駐在員にはその間の代役をお願いし留守中に備えた。

同僚、上司には我が家と同じ年頃の幼い子が居ると言う事も幸いし、多くを語らずとも理解を得られた。

娘が生まれ、新年度となり、いよいよ育休に突入。妻は夜も定期的に母乳をやるので、朝食の準備は私の仕事。パンを焼く程度ながらも、慣れずにあたふたとしている自分を感じる。息子を起こし、せっつきながら、朝食を食べさせて、どたばたと送り出す。

その後に、掃除、洗濯をして妻が起きてくる。洗濯をしながら、普段から家族が清潔な服を着る為に使っている妻の労力の大きさを考え、平凡な事を続ける事の非凡さの大切さを実感する。

夜は、おっかなびっくりしながら、生まれたばかりの娘をお風呂に入れて、どたばたと息子も風呂に入れて寝

かせる。

そんな中で、毎日、娘だけでなく息子の成長も実感出来る事に幸せを感じ、いつまでもその幸福が続いて欲しいと願っている自分が居る。

子育てと言う言葉は、大人の側からの目線の言葉で、共に育っていくのが本当ではと思う。「教育」ではなく「共育」。子供が教えてくれるものは、本当に無限。無邪気なもの、新鮮なもの等々千差万別。大人の凝り固まった頭を解きほぐしてくれる、ある意味、掛け替えの無い癒しかも知れない。

仕事と家庭の両立は難しいと言うが、それは多分、自分次第。二者択一と言う単純なものではなく、周囲と常に話し合っ理解を得ながらバランスを取るのだと思う。その中で、一つだけ明確な事がある。家も仕事も一生懸命であれば、両方共に上手く行く。

仕事に復帰して、ただちに1ヵ月間の海外出張となった。けれども育休のお陰で家がしっかりしていると感じられ、余裕をもって仕事に向かい合え、且つ、集中度も高くなる。家庭に帰れるのを楽しみにしている自分が居て、本当に良いスパイラルになる。

掛け替えの無い家庭と家族。その為に育休が取れないのではなく、取るという強い意志を持って、どうするかを真剣に考え、一日一日を真摯に過ごしていれば、自ずと温かい視線で職場でも受け入れて貰えると思う。

2度と無いその時に接せられるのは、大きな幸せだと私は確信しています。



執筆者の横顔：

- ①会社員・課長、②約3,000人、③40代後半、④平成20年4月～5月(1ヵ月間)

難しい出産、支えられるのは自分だけ。妻とじっくり話し、共有した未来像。家族はやっぱり宝物

家族は宝物



川島 光博さん

今年の6月それはいきなりやってきた。

お腹の赤ちゃんに脳室拡大の疑いがあります、と。

2年前長女が五体満足で誕生していたこともあり我々夫婦への衝撃は、はかりしれないものだった。

その後の検査で、水頭症と二分脊椎の合併症が確認され、誕生後の障がいについても説明がされた。

出産は、帝王切開でさらにすぐの複数の手術が必要であり、対応できる病院がなかなかみつからなかった。

しかし、妻の実家のある高知県で対応してくれる病院が見つかり、里帰り出産を選択した。

この時、私は出産時から出産後の妻のケアをできるのは旦那である私だけだと思い一緒に高知に帰り育児休業を取得することを決意した。

幸い、私は子育て支援サービスを提供する会社に勤めているため、社長もすぐに理解を示してくれた。とはいっても立ち上げてまだ2年目のベンチャー企業であり私も事業本部長という立場であるので一時的であっても抜けることは、会社に対し迷惑をかけるという気持ちが強くあったが社長はじめ会社の理解があり出産予定日前に引き継ぎを完了させ、継続して確認が必要なものは、ノートパソコンや携帯メールに質問連絡をしてもらうことで対応することとした。

通常分娩と違うため、ドクターからの複雑な説明も多く、妻は精神的に不安定になっていたため、育児休業の話をしたときはとても喜んでくれた。一方で今後の職に問題がでないのか妻として不安があったようだが、幾度も今後のことを妻と話をすることで不安も払拭できた。何よりも今回の育児休業がきっかけで妻と多くの話をする機会が増えたことは間違いない。

8月26日無事長男は誕生した。

障がいがあることがわかった日に名前は決めていた。

どんなことがあってもいつでも一緒にがんばっていきましょう、一心同体だよという気持ちを込めて一心（いっしん）と名付けた。

一心は予定通り出生後すぐに手術室に運ばれ、（私も同時に呼ばれ一心の体の状態を確かめ同意書を記入し）水頭症のシャント術と二分脊椎の手術が開始された。

出生後わずか数時間の一心が約半日に及ぶ大手術に挑み、見事手術は大成功し我々はホッとした。

その後、誕生したばかりの一心の入院手続きや術後の経過説明など動けない妻に変わりすべて私が対応した。

その後、一心の術後の経過がよく予定より半月も早く退院を迎えられた。退院後は、妻の両親・4兄弟が協力をしてくれるということで、一時東京へ戻り、今は育児

休業を終了し検診などにあわせて公休日を調整し必要時期に高知に戻るようになっている。

今回育児休業を取得し感じたことは、とにかく出産は妻への負担が多いこと。確かに、普通分娩でなかったからかもしれないが、上の子が生まれる時も出産の大変さは、わかっていて。

休業中には、妻とたくさん話をする機会もあり今後の子育てについても互いに意見をゆっくりじっくりと話し合うことができた。

出産の時こそこれからの未来像を互いに話し合い意思の疎通を図るべきであり、それが、夫婦円満にもつながると感じた。

今の日本にはまだまだ育児休業の取得が復帰後の出世に響くとか取得することは悪いことだという雰囲気があるのが現状だと思う。

現に、育児休業を取得すると友人に話をした時、口をそろえていい会社だね。とみんなが言う。

こういう声がある以上日本は、出生率も下がり離婚数も増え続けると思う。これからの日本を支える若い命と力を担保していくには、もっと育児休業取得が義務づけられるほどの変化が日本には必要なのではないかと。

職場に復帰後も公休の調整など会社側が全面的に理解・支援してくれている。これが当たり前になることを私は望む。

家族は宝物。育児休業を取得したことで、さらに強く感じた。

気づきの多い期間であった。



執筆者の横顔：

- ①サービス業・事業本部長、②0～99人、
- ③30代前半、④2週間